

## 福岡県の河川で見られる希少な生き物

平成 13 年に公表された福岡県のレッドデータブックには 31 種の水生昆虫が記載されています。このうち河川等の流水域を主要な生息場所としている種はトゲナベブタムシ、キベリマメゲンゴロウ、コオナガミズスマシ (p.29)、ツマキレオナガミズスマシ、ムカシトンボ (p.12) の 5 種です。また、環境省が公表している



福岡県のレッドデータブック (中) と環境省のレッドデータブックの昆虫類 (左) 及び陸・淡水産貝類 (右)

レッドリストに記された昆虫も数多く見つかっています。さらに、貝類などでも多くの希少種が生息しています。それらについては、巻末に載せた福岡県の河川で確認した生物種リストの中でも表示しています (巻末のリストは福岡県保健環境研究所で行った調査等で確認した種のみで、これ以外にも福岡県に分布することがわかっている希少種は多数あります)。流水域に生息する昆虫でレッドデータブックに記載された種は止水域に生息する種と比べると数は少ないのですが、このことは止水域と比べて流水域の環境が保全されていることを反映しているのではなく、主に止水域に生息するトンボ目、カメムシ目、コウチュウ目と比べて、主に流水域に生息するカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目についての分類学的研究が進んでないことや、調査資料が不十分であることを反映しているものと思われます (福岡県のレッドデータブックに記された水生昆虫は全てトンボ目、カメムシ目、コウチュウ目に属する種です)。実際に河川で比較的普通に見られる種でも、まだ正式な名前が確定していない種も多く、名前がつかないまま絶滅してしまった種も存在していた可能性があります。

先に示した、福岡県のレッドデータブックに記載された 5 種の河川に生息する昆虫の内ムカシトン



ハガマルヒメドロムシ (環境省情報不足)  
福岡県で採集された標本に基づき記載された種で、その後も福岡県以外での記録はほとんどありませんでしたが、最近中国地方でも確認されています。



ヨコミゾドロムシ (環境省絶滅危惧Ⅱ類)  
河川下流域の流れが緩やかな場所でツルヨシなどの抽水植物につかまっています。



ケスジドロムシ (環境省準絶滅危惧)  
河川内の流木上や植物の根などにつかまっている個体が見つかります。

ボを除けば全て中下流域に生息する種です。このことは昆虫以外でも同様で、貝類や甲殻類では河口域に生息する種が多く、レッドデータブックに記載されている種の多くが河口域の種です。一般に河川下流部は上流部と比べると周囲の人口密度も高く人間活動の影響を受けやすくなっています。また、川は上流から下流へと流れていき汚濁等は徐々に蓄積していきます。一方、河川はいくつもの支流を合わせて一つになっており、一つの河川に上流域は複数ありますが下流は一つしかありません。下流部の保全是下流だけでなく河川流域全体で考えていく必要があるでしょう。

この冊子では主に流水域で見られる生き物について解説していますが、河川敷の溜まり水などはセスジゲンゴロウ類やミズカマキリ、コオイムシなどの止水域に生息する水生昆虫にとって重要な生息場所になっています。また、陸生の昆虫についても川原自体や川原にはえる植物に固有の種は多数知られています。福岡県のレッドデータブックに記された昆虫の中でも、アイヌハンミョウやルイスハンミョウは砂地の川原に、ジウサンホシテントウは水辺のヨシ等の葉上に見られる種で、また、コムラサキは河川敷のヤナギ類を食樹としており、このような昆虫は水生昆虫に含めることはありませんが水辺と密接な関係にある種です。河川環境は多くの生き物の生息場所になっており、水質だけでなく河川環境全体を保全していく必要があるでしょう。



キベリマメゲンゴロウ（福岡県絶滅危惧Ⅱ類）  
河川下流域に生息しておりモンキマメゲンゴロウ (p.28) と同時に見つかる場合もあります。



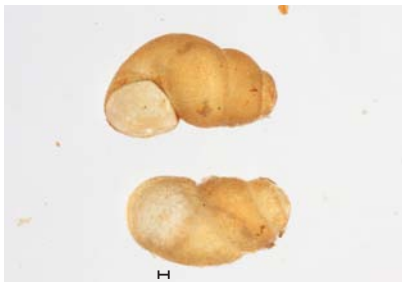
カンムリセスジゲンゴロウ（福岡県絶滅危惧Ⅱ類）  
河川敷にできた水たまりなどの浅く落ち葉等が豊富な水域に生息しています。



コオイムシ（福岡県準絶滅危惧、環境省準絶滅危惧）  
雄が背中に卵を背負って保護することで有名な昆虫です。



ヒメマルマメタニシ（福岡県絶滅危惧Ⅰ類、環境省絶滅危惧Ⅱ類）  
タニシを小さくしたような形をしており、水田や流れが緩やかな水路で見つかります。



ホラアナミジンニナ（環境省絶滅危惧Ⅱ類）  
河川源流部の細流などに生息する小さな巻貝です。地方によって形態に多少変異があり福岡県の個体はヒコサンミジンニナと呼ばれていましたが、最近ではホラアナミジンニナの変異とされています。



ジウサンホシテントウ（福岡県絶滅危惧Ⅱ類）  
水生昆虫には含めませんが、水辺のヨシ等の葉の上で見られます。テントウムシの中では珍しく縦長の長円形の種です。

## 福岡県の河川で見られる外来種

近年生物多様性に対する脅威の一つとして、外来生物の影響が重視されています。淡水域における外来生物としては、オオクチバス(ブラックバス)やブルーギル、タイリクバラタナゴといった魚類や、ブラジルチドメグサやボタンウキクサなどの外来水草が有名でマスコミ等でもしばしば話題になります。この冊子で取上げている生物の中で、昆虫類については幸いにも外来種はほとんど見つかっていません。しかし、昆虫以外の無脊椎動物では様々な外来種が見つかり、近年新たに見つかっている種も多いようです。また、福岡県下ではまだ確認していませんが、コモチカワツボ、ヌノメカワニナ等の外来の巻貝も近年各地で見つかり、福岡県への侵入が心配されます。

貝類などの小型の無脊椎動物の場合、多くは水草等について国内に持ち込まれ非意図的に野外に流出しているものと考えられます。また、台湾シジミ等の例では食用として輸入される外国産シジミが水洗や選別時に流出したものと考えられています。国内移動の例としては、ホタルの餌としてカワニナを移動させる際に混入する例も知られています。また、ビオトープ作りのために在来の水草を移す際に移動させる例も多いようです。こうした外来種の非意図的移動を防ぐためにも、在来種であっても生物の移動・放流はできるだけ行わないようにしたいものです。また、水辺の自然観察等でも、続けて別の場所で行う際に網や長靴等についた生物を別の場所に分散させるようなことがないように気をつける必要があるでしょう。

### 福岡県の河川への侵入が心配される外来生物

(写真提供 神奈川県環境科学センター 石綿進一氏)



コモチカワツボ

ニュージーランド原産で現在ではヨーロッパや北米に広く侵入しています。



ヌノメカワニナ

熱帯から亜熱帯に広く分布している種で、国内でも南西諸島には自然分布していましたが、北米等にも侵入し在来種に影響を与えています。国内でも、近年九州以北の各地で見つかりしています。

### 福岡県下の河川で見られる外来生物。



アメリカツノウズムシ

北米原産のウズムシで、在来種のナミウズムシより大型で側方の突起が顕著で「ツノ」のように見えます。



オオマリコケムシ

北米原産でサンゴのように多くの個体が集まって直径10～100cm程度の群体を作っています。ため池や流れがほとんどない堰の上流部などで夏場に見つかることがあります。



ハブタエモノアラガイ

北米原産の巻貝です。モノアラガイと比べると細長く、殻表面に布目状のすじが見られます。

この他に本文中に出てきている種類も多数あります(巻末リスト参照)。